

# 「HIV 陽性者の抗 HIV 療法に対する意識・経験調査」 調査研究結果報告

この調査研究結果報告は、HIV 陽性者向けのウェブ調査の集計結果を紹介するものです。調査研究に参加いただいた HIV 陽性者のみなさん、調査協力をしてくれた NGO/NPO の方々はじめ、多くの方々に結果をフィードバックし、また結果を活用してもらうために、公表するものです。

2024.8.30

抗 HIV 療法意識・経験調査研究委員会

## 本研究の概要

### ・ 本研究の正式名称

日本の HIV 陽性者での抗 HIV 療法についての意識・経験、及びそれらに関連する福祉制度利用状況等についての調査研究

### ・ 本研究の調査体制

本研究は「抗 HIV 療法意識・経験調査研究委員会」が検討実施しました。

<メンバー>

- ・ 放送大学教養学部 教授 戸ヶ里泰典 (研究責任者)
- ・ 京都大学医学研究科 講師 細川陸也
- ・ 明治大学情報コミュニケーション学部 助教 大島岳
- ・ 非営利活動法人日本 HIV 陽性者ネットワーク・ジャンププラス 代表理事 高久陽介
- ・ 株式会社アクセライト シニアリサーチャー/HIV Futures Japan プロジェクト 代表 井上洋士

なお、本研究は、研究責任者が所属する研究機関（放送大学）の長の許可を得て研究を実施しました。また、放送大学研究倫理委員会に研究倫理審査の申請をし、承認されています（通知番号：2023-77）。調査は株式会社アクセライトに委託して実施しています。

### ・ 調査研究の目的

抗 HIV 療法に対する意識・経験等について、日本国内の HIV 陽性者ではどのような状況にあるのかを明らかにすること。

### ・ 調査対象

HIV 陽性であることが検査ですでにわかっている HIV 陽性者、かつ日本国内在住で 18 歳以上の方。

### ・ 調査方法

無記名自記式ウェブ調査。調査期間は、2024 年 4 月 8 日から 5 月 8 日。

### ・ 分析対象

概ね全ての調査セクションへの回答してくれた方は 931 人。得られた回答データを精査し、不正回答及び調査対象者でない方の回答を除外し 927 人の回答を有効回答として分析対象にしました。以下では、特に断りがない場合、927 人中の割合を示しています。

### ・ 本研究の資金源

本研究実施のための資金は、ギリアド・サイエンシズ株式会社から拠出されています。

## 調査研究結果の概要

### 1. 健康状態

・健康状態は全体としては良好でしたが、約7割で何らかの慢性疾患があるとし、また約7割では何らかの自覚症状があるとしていました。PHQ-9というスケールを用いたところ、4人に1人がうつ病性障害の可能性があることがわかりました。

### 2. 通院

・全体の96%が定期的に通院しており、通院頻度は3ヶ月に1回程度が約78%でした。  
・通院の機会に医師と話す平均時間は、定期通院者の約半数で「5分以上10分未満」となっていました。医師と話す・話した事のある内容としては、「最近の体調について」「薬の飲み忘れについて」が各々半数以上と多くなっていました。

### 3. HIV 陽性診断直後

・HIV 陽性診断された時期別にグループ化して比較検討したところ、診断直後に「これで自分はまもなく死ぬんだ」という思いになる人の割合は診断時期が近年になるほど少なく、「HIV の治療を受ければ健康を維持することができるので、ほっとした」「今後の暮らしや人生設計を変えていこうと思った」という人の割合は診断時期が近年になるほど増えていることがわかりました。また、いずれのグループでも、HIV 陽性診断直後にネガティブ情動（気分）の平均値は高いのに比べ、現在（＝調査時点）は低い平均値でした。一方、いずれのグループでも、ポジティブ情動（気分）の平均値は HIV 陽性診断直後は低くなっていましたが、現在は高い平均値でした。ネガティブ・ポジティブいずれの情動についても、1996年以降に HIV 陽性診断された人のいずれのグループでも、ほぼ同じ状況でした。

### 4. 身体障害者手帳取得

・免疫機能障害で身体障害者手帳を取得できないために抗 HIV 薬での治療を始めることを断念したことがある人は55人（全体の6%）おり、このうち過去1年間に断念した人は18人（33%）でした。この18人は自由記載欄に、手帳発行基準を満たすまで待たされることの恐怖や不安、いらだち、悲しい・むなしい、制度が古い、などを記していました。うち10人は調査回答時点でまだ取得していない・申請していない状況でした。

・免疫機能障害で身体障害者手帳を取得しようとしていない50人に、その理由をたずねたところ「担当窓口の人に自分のことが知られてしまうと思うから」「助成制度を利用しなくても医療費を十分に払えると思うから」が多くなっていました。

・この1年間に役所や保健所、福祉事務所等の公的機関で、HIV 陽性であることを理由に不当な扱いを受けたことがある人は25人（3%）でした。役所や医療機関で受けた扱いについての記載が多くなっていました。

### 5. 治療

・通院している人のうち、現在 HIV の治療薬を処方されている人は98%でした。

・通院していても抗 HIV 薬を処方されていない理由としては「医師から提案されたため」「身体障害者手帳を取得するまえの検査を受ける必要があるため」「身体障害者手帳の申請をするための準備をしているため」が多くなっていました。

・服薬状況は、毎日忘れずに飲む、あるいはたまに飲み忘れる、をあわせると、ほぼ全員で良好でした。

## 6. 治療薬の変更

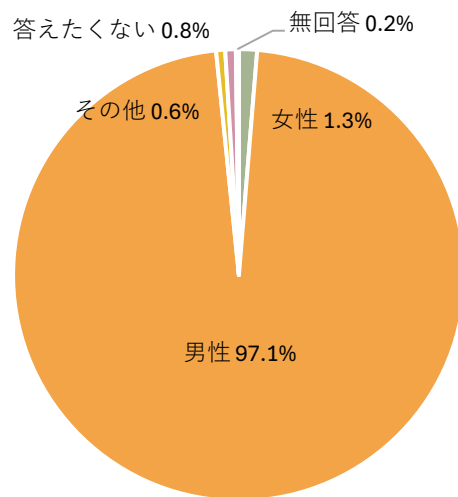
・抗 HIV 薬の変更経験がある人は 61%でした。

・過去 3 年以内に、新しい抗 HIV 薬について、医療関係者から「しばしば／たまに紹介されたことがある」人は、定期通院者のうち約半数でした。新しい治療薬が発売になったら、医療関係者から「とても紹介してほしい」「そこに紹介してほしい」をあわせると 96%になりました。今の治療薬で順調に治療できていても、より良いと思う別の薬を紹介されたら治療薬を変更したいと考えている人は 84%にのぼりました。

## どんな人が回答してくれたか

- ・回答者は、性別は男性が97.1%、女性が1.3%（図F-1）、年齢の範囲は19歳から82歳で、40代が35.6%と最も多く、ついで50代27.0%、30代24.9%でした（図F-2）。
- ・ゲイの方が84.7%、バイセクシュアルの方が10.7%、ヘテロセクシュアルの方が2.7%でした（表F-1）。トランスジェンダーの方は11人（1.2%）でした。
- ・居住地は全都道府県にわたっていました。東京都が30.4%と最も多く、次いで大阪府の12.0%、愛知県の6.7%の順に多くなっていました。
- ・HIV陽性であることを知った時期の範囲は1991年-2024年で、2019-2024年が33.9%、2016-2018年が16.2%、2008-2015年が30.7%、2007年以前が18.9%でした（表F-2）。
- ・医師にAIDS発症していると言われた人は22.0%でした（表F-3）。

図F-1 性別 (n=927)



図F-2 年代 (n=927)

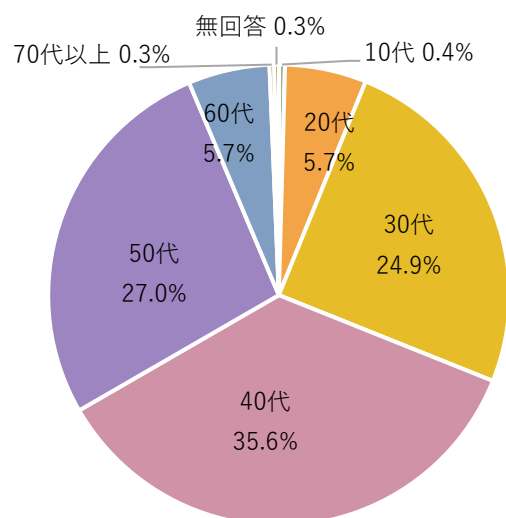


表 F-1 セクシュアリティ (n=927)

	n	%
ヘテロセクシュアル (異性愛者)	25	2.7%
バイセクシュアル (両性愛者)	99	10.7%
ゲイ (男性同性愛者)	785	84.7%
レズビアン (女性同性愛者)	0	0.0%
その他	5	0.5%
わからない	6	0.6%
決めたくない	6	0.6%
無回答	1	0.1%

表 F-2 HIV 陽性診断時期 (n=927)

	n	%
2007 年以前	175	18.9%
2008-2015	285	30.7%
2016-2018	150	16.2%
2019-2024	314	33.9%
無回答	3	0.3%

表 F-3 AIDS 発症有無 (n=927)

	n	%
医師に AIDS 発症していると言われた	204	22.0%
医師からは言われていないが、AIDS 発症していると思う	24	2.6%
AIDS 発症したことはない	653	70.4%
わからない	42	4.5%
答えたくない	4	0.4%